

静注と UFT 400mg/day の連日経口投与) を施行し、同時に血清 5-FU 濃度を測定した。PR 7 例、NC 5 例 (内 MR 3 例) であり、PR 症例の血清 5-FU 濃度の最高値は 203 ~ 356ng/ml で患者ごとに異なっていた。Grade 2 以上の副作用は認められなかった。消化器癌術後再発症例に対して PMC 療法は有効であり、血清 5-FU 濃度をモニターすることが有用と思われた。

12 高度進行胃癌に対する術前化学療法 (MFLP 療法)

梨本 篤・藪崎 裕・滝井 康公
佐藤 信昭・土屋 嘉昭・田中 乙雄
佐野 宗明

県立がんセンター新潟病院外科

高度進行胃癌に対し MFLP 療法による術前化学療法を施行してきたので、抗腫瘍効果および延命効果を中心に検討した。対象は 2001 年末までに経験した進行胃癌 59 例 (男/女: 45/14, 平均年齢 60.7 歳) である。プロトコールは MFLP 療法である。

【成績】1. 52 例に手術がなされ、47 例の原発巣切除が可能であった。切除例のうち根治 B は 53.2 % であった。

2. 奏効率は 54.2 % (CR1 例, PR31 例) であった。

3. 部位別奏効率は、リンパ節転移 65.3 %, 原発巣 50.8 %, 肝転移 31.3 %, 腹膜播種 20.0 % であった。

4. 全例に何らかの有害事象がみられたが、grade 3 以上は白血球減少 15.3 %, 貧血 18.6 %, 血小板減少 5.1 %, 悪心 13.6 % と低率であり、治療関連死亡は 1 例もなかった。

5. 対象例全体の生存成績は 1 生率 36.8 %, 2 生率 17.3 %, 5 生率 14.4 %, MST 294 日であった。

6. responder の MST は 471 日, nonresponder は 199 日であった ($P < 0.001$)。

7. 根治 B の MST は 484 日, 5 生率 30.9 % であったが、根治 C は MST 310 日, 最長生存 597 日であり約 6 か月の延命がみられた ($P = 0.0048$)。

8. 病理学的な奏効度と予後は相関しなかった。

9. Historical control ではあるが best supportive care 14 例の MST は 81 日で 1 年生存例はなかった。

【結語】術前 MFLP 療法はリンパ節転移に対し最も治療効果が期待でき、responder や根治 B が可能であった場合は延命効果も期待できた。

13 10 年間 Howship-Romberg sign を呈した後、回腸穿孔を伴い閉鎖孔ヘルニアと診断された一例

渡辺 真実・長谷川 潤・篠川 主
鰐淵 勉・吉田 圭介・佐藤 巖

南部郷総合病院外科

症例は 81 歳女性。約 10 年前より腰痛と両下肢痛を訴えていた。整形外科、内科で対症療法にて経過観察されていたが、イレウス症状があり当科受診。CT にて右閉鎖孔ヘルニアと診断され、緊急手術となった。開腹所見にて閉鎖孔ヘルニア陥頓による回腸穿孔、および両側閉鎖孔ヘルニアを認め、小腸部分切除術、ヘルニア修復術を施行した。

当科で経験した 28 例の閉鎖孔ヘルニアのうち 5 例が、診断以前より Howship-Romberg sign と考えられる症状を呈していた。閉鎖孔ヘルニアは診断困難な疾患であり、不可逆的陥頓状態に至るまでに数年間の病悩期間をもつことも稀でない。高齢化社会に伴い閉鎖孔ヘルニアの症例は増加すると考えられ、今後、外科のみでなく他科においても、閉鎖孔ヘルニアの診断知識が必要とされることが考えられる。

14 肛門周囲膿瘍より発症した Fournier 症候群に対し開放ドレナージが奏効した一例

番場 竹生・中川 悟・若井 俊文
田邊 匡・石川 卓・畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科

症例は 60 歳男性。2002 年 5 月上旬に肛門周囲痛にて発症。他院にて肛門周囲膿瘍として切開、